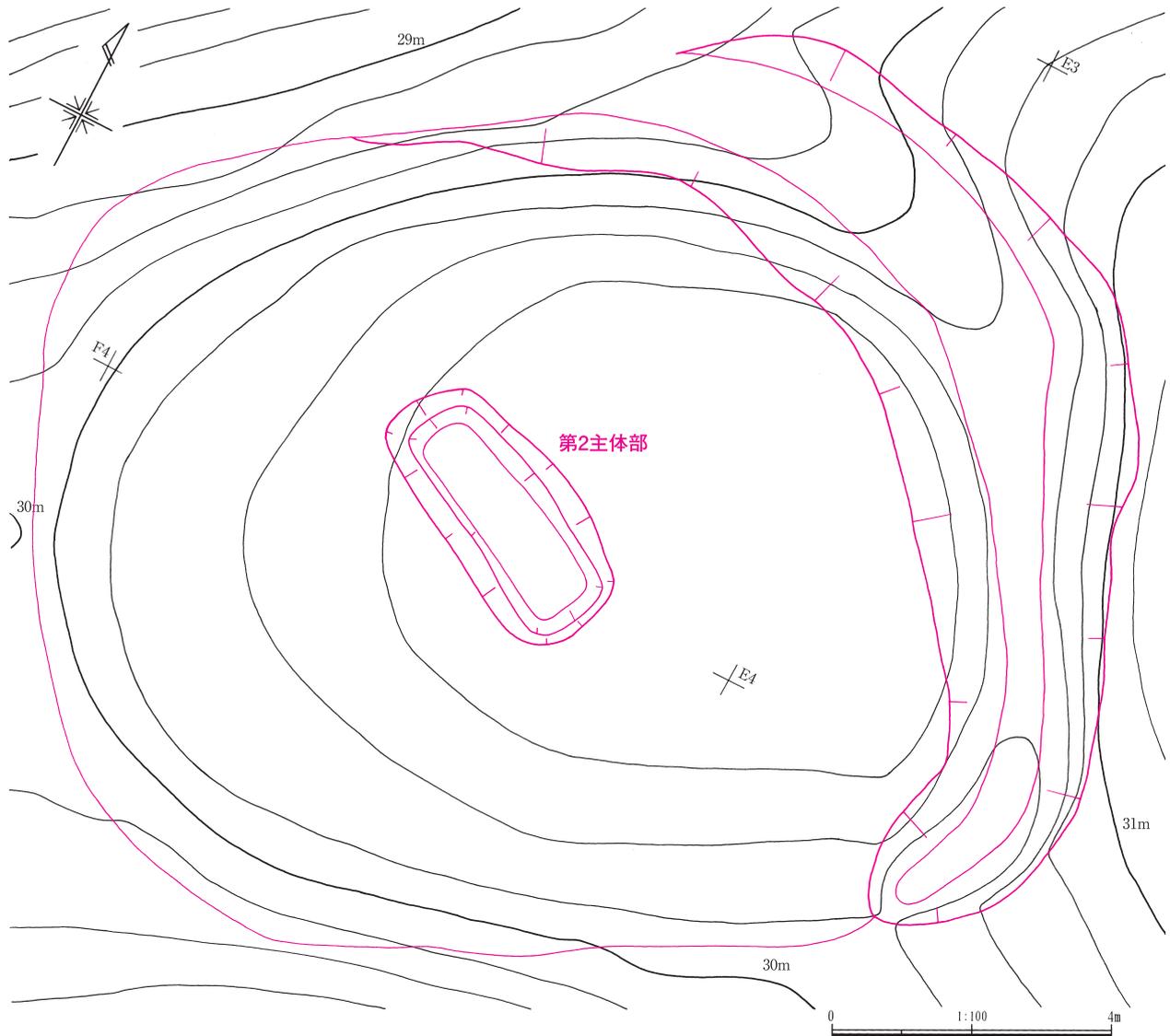
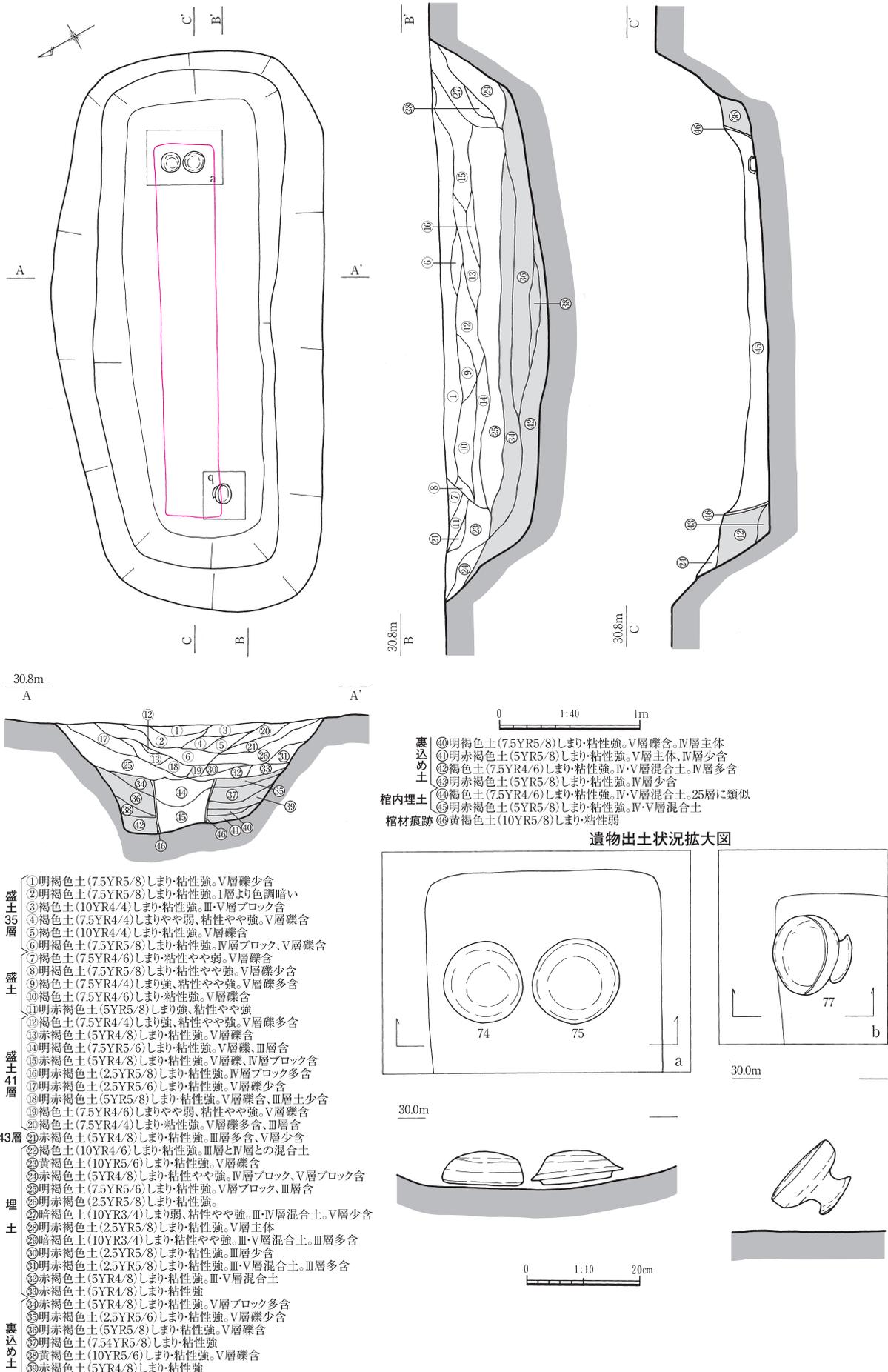


に地山掘削土を用いている以上は、古段階にも周溝と墳丘下部は地山を掘削して整形されたものと考えられる。

盛土は、新段階墳丘と異なり、細かい単位で行われる部分と大きな単位で行われる部分が見られる。土層断面からは、盛土の工程を次のようないくつかの段階に分けることができる。①：東側周溝の掘削に伴う排出土を、墳丘東縁部に細かい単位で盛土する(36～40層)。墳丘東縁付近の旧地形は、東から下ってくる斜面と鞍部平坦面の傾斜変換点にあっており、東西の高低差がある。この地形を利用しつつさらに盛土を行うことで、墳丘の東縁辺に堤状の高まりが造られる。②：①の内側の墳丘東半部に大きな単位の盛土を行う(35層)。③：北側、西側、南側それぞれの墳丘縁辺部に細かい単位で盛土を行い、堤状の高まりを造る(21～34層)。これによって、墳丘の縁辺を一周廻る土手が形成される。④：③の土手の内側に非常に大きな単位の盛土を1層施す(20層)。以上のように、古段階の墳丘構築は、まず墳丘外縁に細かい単位の盛土で堤を築き、その内側に大きな単位の盛土を施して墳丘を完成させるという、規則的な手順を踏んだ工法によって行われている。



第45図 27号墳古段階墳丘平面図



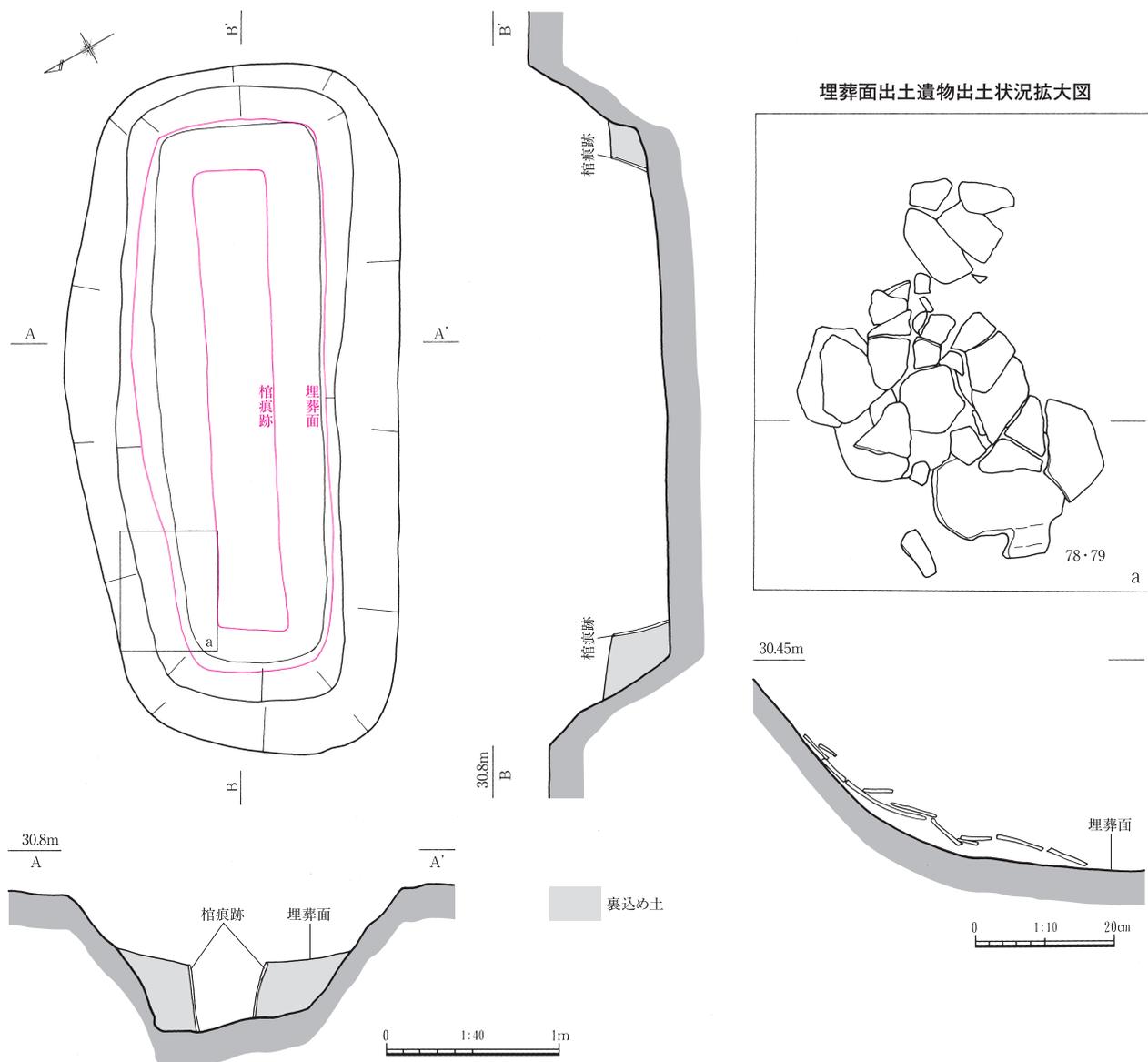
第46図 27号墳第2主体部

## 第2主体部

第2主体部は、古段階墳丘の構築以前につくられた埋葬施設である。主体部は墳丘のほぼ中心に位置する。掘り込み面は旧表土Ⅲ層(44層)上面で、古段階墳丘の墳頂から約30cm低い位置にある。墓壙は平面が長方形、断面が逆台形を呈し、上面の規模は長軸4.0m、短軸1.95m、深さは0.75mを測る。主軸はE-30°-Sを採り、墳丘長軸や尾根筋に対して斜交している。

第2主体部では、墓壙埋土上～中層(1～33層)を除去した段階で、墓壙のほぼ中央から、木棺痕跡および棺内埋土の可能性のある明瞭な長方形プランを検出した。プランの形態は整った細長い長方形で、規模は長軸約2.8m、短軸約0.5mを測る。このプランに対して設定したベルトの土層断面の観察によって、棺材の痕跡と見られる立ち上がりや棺裏込め土と見られるしまりの強い土層を明瞭に確認できた。釘は出土していないので、組み合わせ式の木棺が用いられていたと考えられる。棺の大きさは、断面下端で計測すると、長さ2.7m、幅0.4m、高さ0.3～0.4mほどとなる。ただし、土圧によって歪みが生じていると考えられるので、少なくとも高さはこれより多少高かったものと思われる。

墓壙内の堆積は、大きく見て、墓壙埋土上層、墓壙埋土中層、棺裏込め土、棺材および棺内埋土の

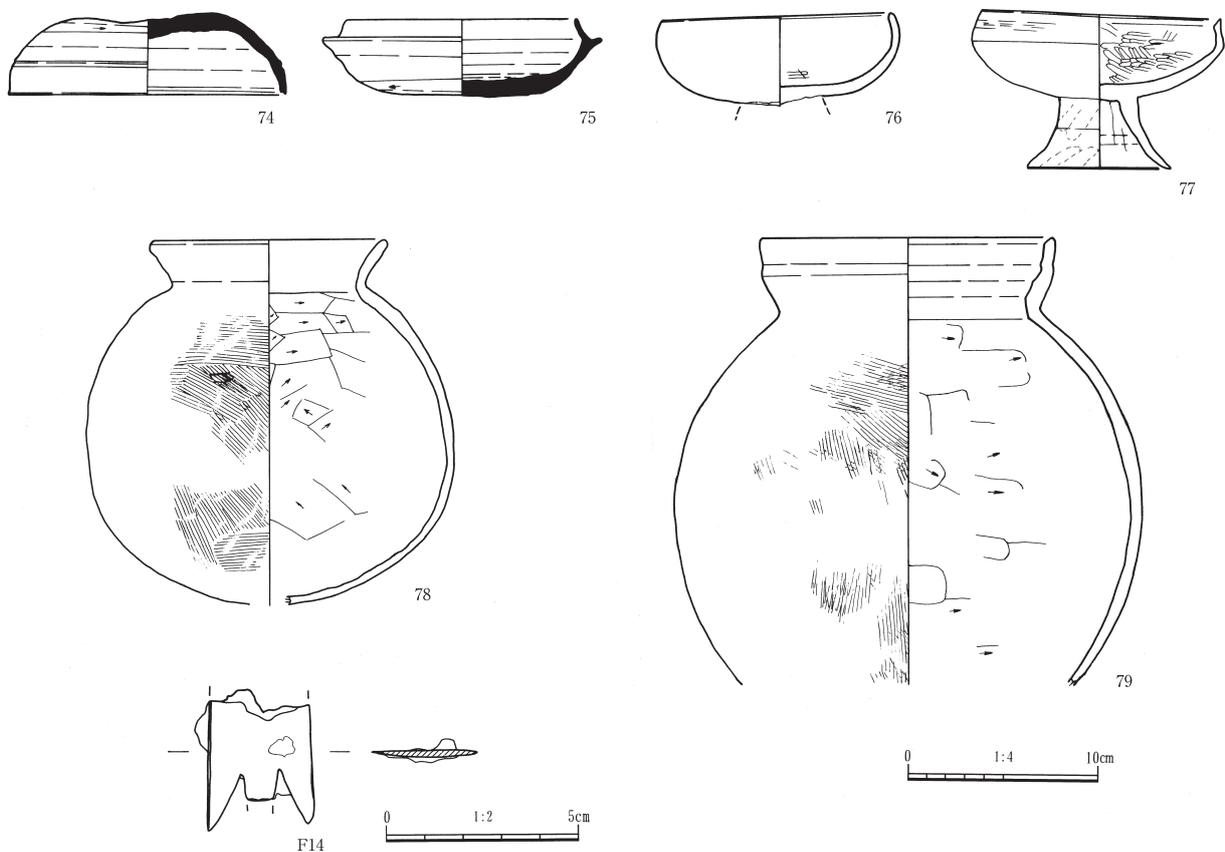


第47図 27号墳第2主体部木棺痕跡・埋葬面

4つの単位に分けられる。埋土上層(1層～21層)は墳丘盛土層と対応する土層で、上部は墳丘盛土の落ち込みも含まれるだろうが、その大半は墓壙上部を墳丘構築過程で埋め戻したものと考えられる。埋土中層(22層～33層)は墳丘盛土と直接対応しない墓壙の埋め戻し土である。土層の単位が大きいことから、この段階の埋め戻しは一挙に行われたようである。棺裏込め土(34～43層)は棺外側に堆積するしまりの強い土層で、土を何度か水平に敷き詰めることで棺を固定した様子がうかがえる。棺内埋土(44・45層)はいずれも埋土中層の落ち込みが主体となって形成されているものと思われる。棺材痕跡(46層)はしまり・粘性の弱い土層で、長軸断面、短軸断面とも上方に向けてやや開く立ち上がりを見せる。

遺物は棺内および棺外から出土した。棺内からは、須恵器坏蓋74・坏身75と土師器脚付碗77が出土した。須恵器坏は、棺内東端付近の底面にそれぞれ口縁を下にして伏せ並べられた状態で出土したことから、転用枕として使用されたと考えられる。土師器脚付碗は、棺内西端付近の底面からわずかに浮いた位置で、若干傾いた状態で出土した。棺外からは、土師器脚付碗の碗部のみ(76)と土師器甕2個体(78・79)が棺裏込め土上面でまとまって出土した。棺裏込め土上面は埋葬面に相当するため、これらの土器は被葬者を埋葬する際に置かれたものと考えられる。ほかに、鉄鏃片F14が棺西側の裏込め土中から出土したが、偶発的に混入したのか、意図的に裏込め土に入れられたのかは不明である。

墓壙内の堆積状況と遺物の出土状況をあわせて整理すると、以下の埋葬過程が考えられる。①：棺材を設置し(46層)、棺裏込めを用いて棺を固定する(34～43層)。②：須恵器枕を設置し、被葬者を埋葬する。棺内の被葬者足下側に土師器脚付碗を副葬する。棺外には土師器の脚付碗碗部と甕2個体



第48図 27号墳第2主体部出土遺物

を供献する。③：墓壙を途中まで埋め戻す。④：墳丘盛土とあわせて墓壙の上部を埋め戻す。

## 第2主体部出土遺物

棺内出土の須恵器坏蓋74と坏身75はセットを成す可能性が高い。74は肩部に沈線をめぐらして稜を表現しているほか、口縁端面にも沈線を施して段を形成していることから、田辺編年TK10段階並行のものと考えられる。75も74とセットと考えればTK10段階並行としてよいだろう。棺内出土の脚付碗77は、屈曲する碗体部と外に開く脚部に特徴がある。器壁が薄く、調整も丁寧に行われている。

棺外出土の遺物はすべて土師器である。76は脚付碗の碗部で、脚部は意図的に折り取られている。本来は、77のような短く太い脚がついていたと考えられる。甕には、小型で単純口縁をもつ78と、退化した複合口縁をもつ79がある。これらの土師器はいずれも須恵器との大きな時期差はないと考えられる。

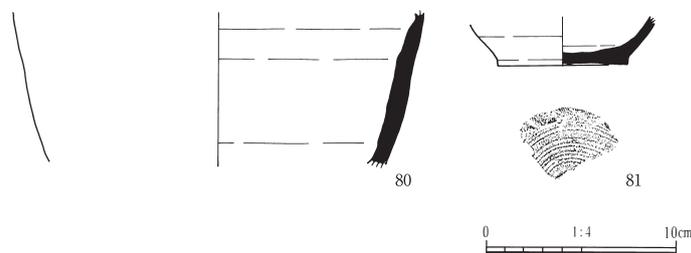
出土遺物から見て、本主体部では、古墳時代後期中葉後半に埋葬が行われたと考えられる。

## 墳丘出土遺物(第49図、表4、PL.77)

表土・流土の除去の際に、須恵器片や土師器片が少量出土した。図化できた2点の須恵器を掲載する。いずれも墳丘東側周溝内からの出土である。80は須恵器長頸壺の体部である。81は底部に回転糸切り痕を残す須恵器坏である。いずれも古代の遺物と考えられることから、これらは本墳の築造以後に流入したものである。

## 小結

27号墳では、21号墳同様、古墳墳丘の増築をとまなう「追葬」が確認された。初葬は地山から墓壙を掘り込み、その上に墳丘を築く。追葬は初葬時に築いた墳丘上から墓壙を掘り込み、その上に墳丘を築く。いずれも、墳丘を築いてから埋葬を行うのではなく、まず埋葬を行ってから墳丘を築いている。この過程は、21号墳で認められた埋葬・墳丘形成の過程と全く同じである。主体部出土遺物の検討からは、初葬から最終埋葬までの期間は須恵器型式で1型式の範囲内に収まると考えられる。したがって、本墳の初葬と古段階墳丘構築は古墳時代後期中葉(TK10型式並行)に行われ、最終埋葬と墳丘増築も同じく古墳時代後期中葉(TK10型式並行)のうちに行われたと考えられる。



第49図 27号墳墳丘出土遺物

## 28号墳(第50～58図、表4・11・12、巻頭図版6・7、PL.43～54・83～85)

### 位置

調査地中央付近のF5・F6・G5・G6グリッドに位置する。周辺は丘陵鞍部から南斜面への傾斜変換部にあたり、本古墳は標高約27mからの約30mにかけての斜面に立地する。28号墳の北側には22号墳と23号墳が近接しており、本古墳の周溝が22・23号墳の墳丘裾部を切っている。

調査前の地表面には墳丘の高まりが現れていた。その中央部付近に乱掘による窪地があり、その周辺に大型の石材が散乱していたことから、破壊された横穴式石室の存在が予想できた(第69図参照)。

### 調査経過

掘削開始前に墳丘上と乱掘坑内の落葉などを除去したところ、石室石材と思われる礫が並んでいるのを確認できた。この時点で横穴式石室の存在が確実になり、おおよその石室の位置や形状が判明した。そこで、これを基に石室の主軸を設定し、主軸ライン上(A-A')とそれに直交するライン(B-B')に墳丘の土層観察用ベルトを設けた。また、28号墳と22号墳・23号墳それぞれとの切り合いを確認するために、それぞれの墳丘中心間を結ぶラインでベルトを設定した。その後、表土・流土・周溝埋土を掘り下げ、墳丘面を検出した。

横穴式石室は表土・流土を除去する過程で天井石が残っていないことが分かったため、石室内に主軸方向1本、短軸方向2本のベルトを設定し、上部から掘り下げていった。石室内を完掘した後、石室を解体し、墳丘盛土と石室掘り方内の掘り下げを行った。

### 墳丘(第50・51図)

墳丘は、ほぼ全周に周溝がめぐる円墳で、その規模は周溝内側で径約12m、周溝を含めると径約13.5mを測る。墳丘南東側の一部では周溝を検出していないが、墳端付近が犬走り状の狭いテラス地形となっていることから、本来は周溝が一周していたか、周溝と連続した段切りが行われていたものと思われる。乱掘によって墳丘上部は激しく破壊されており、本来の墳頂面を全く残していない。残存する墳頂の最高点は標高29.95mで、これと南側墳端との比高差が約3.0m、北側周溝底との比高差が約0.7mである。

墳丘は周溝の掘削と盛土によって築かれている。盛土の下面には旧表土がなく、明らかに地山が削平された部分も見られる。このため、古墳構築前に一旦全面的に旧地表を整地していることが考えられる。この工程と同時かそれに引き続いて、横穴式石室の掘り方を掘削している。その後、石室の構築と墳丘への盛土をほぼ並行しながら行っている(詳細については後述)。盛土には石室掘り方と周溝の掘削土が用いられたと考えられる。なお、周溝掘削がどの段階で行われていたかについては土層断面の観察からは明確にはできない。

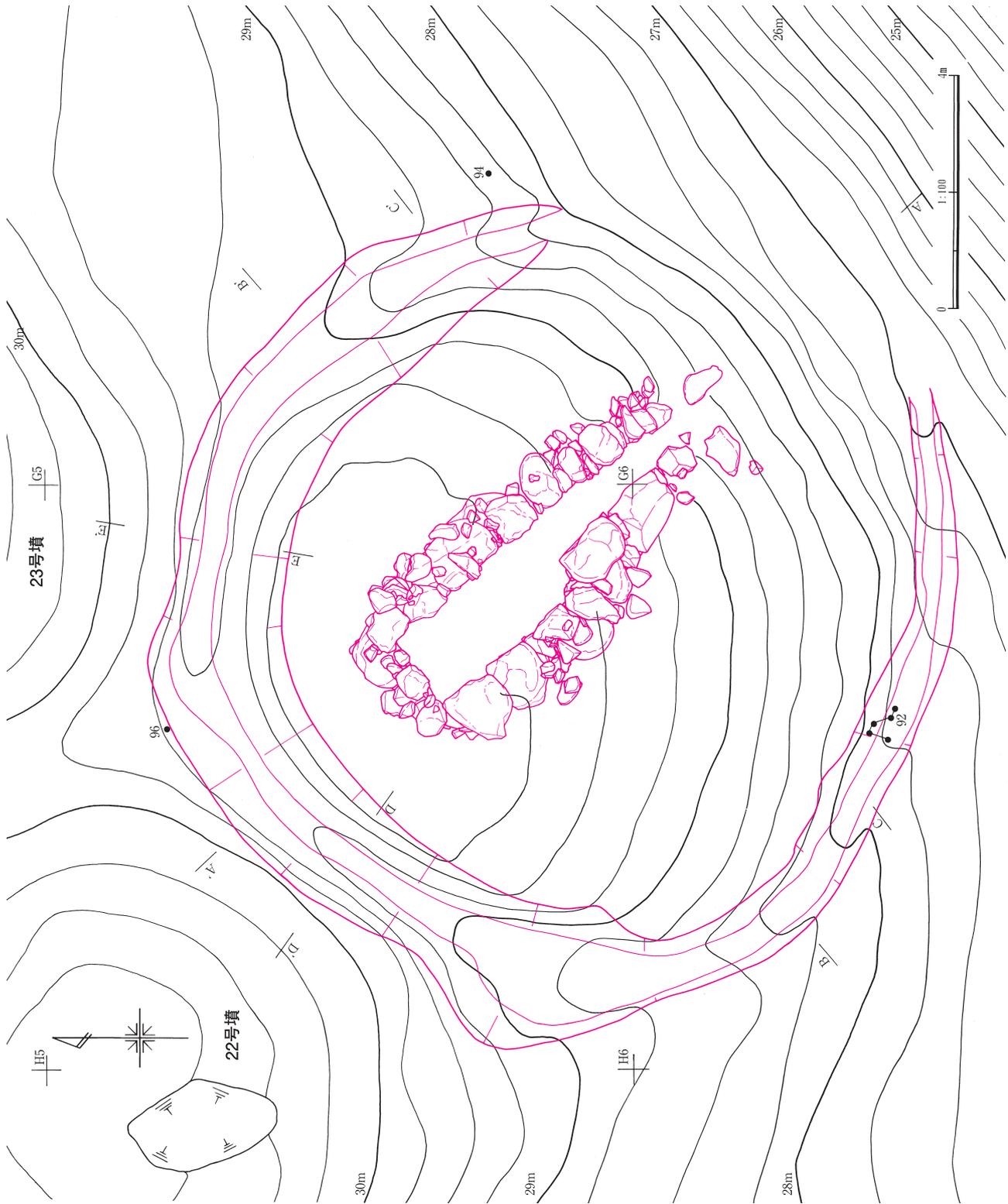
### 横穴式石室(第51～55図)

#### <石室の位置>

本古墳の埋葬施設は1基の横穴式石室である。石室は乱掘によって破壊されており、天井石と壁面上部の石材が取り除かれている。石室の設けられた位置は墳丘のほぼ中央で、墳丘南東斜面に開口する。開口部付近の標高が28.3mで、墳端よりも約1.3m高い。

#### <石室の形態と構造>

**平面形態** 石室の平面形は右片袖式で、残存長は東側壁側で6.2mを測る。石室主軸はN-40°-Wを



第50図 28号墳丘平面図